

「銀河鉄道とスマイルトレイン」

上釜葉月

この電車は、本川越行きである。決してあの日には繋がっていない。どのくらい待っていていけば、到着するのかな。どのくらい走っていていけば、どこに行くのかな。……どれだけ愛されたら安らげるのだろうか。どれだけ傷ついたら、強くなれるのだろうか。どれだけ書いたら、何が届くのだろう。どれだけ泣いたら、優しくなれるのだろうか。

三年前、僕が中学一年生のときだ。とても印象的な出来事があった。登校中に、一人の女の子が電車に乗り込んできた。彼女は僕の隣の座席に座って、俯いていた。

すぐ隣にいた僕だけが知っている。彼女は泣いていたのだ。

当時の僕には、ハンカチを差し出す勇気はなかった。

でも、見て見ぬふりができるほど、冷たい世間に仲間入りしていなかった。

ただただ、僕はおろおろと彼女を見つめていた。

何もできないなら、放っておけばよかった。

今でも後悔している。

いつもそうだ。自分は他人の役に立つようなことを何一つしてあげることができない。

自分の気遣いが変に思われないか、不安でいっぱいなのだ。

あんまり自分には生きる権利があるように思えない。

だからこそ、クラスメイトにひどいことを言われても愛想笑いを返したり、頼まれごとをされたら率先して引き受けたりすることで、世間から見捨てられないように必死なのだった。

教室で微笑んでいると、どす黒い気持ちが始まりこっぴどいく。

僕は今年の夏休みに本川越に行く。そしてもう帰ってこない。帰ってこないんだ。

そう心の中で言うのと、いくら心澄んでいく気がした。

授業が終わると、後ろの席の木塚さんが微笑んできた。

「お疲れ」

同級生の鉄オタの女子のあいさつに僕は笑顔を返す。普通の高校一年生男子は、きっと女子にこんなに笑わない。でも、僕には笑うことしかできないから。

中学時代に僕を裏切った奴らを、僕はきつと恨んでいる。きつとじゃない。根深く恨んでいる。でも、僕はそれを悟られないように、演技をしている。

木塚さんも、いつもは笑っているけれど、その姿は偽りなのだろうか。

みんな自分を偽っているのだろうか。

でも僕は、木塚さんのことを時々、本当にバカなんじゃないかと思う時がある。運動も勉強もできないくせに笑っているのだ。

僕がこんなに周囲にへつらって、相手の機嫌を損ねないように自分を偽っているのに。彼女には何一つないのに、どうして幸せそうにしているのだろうか。

そんな彼女はもちろん、周囲からは疎まれてる。お弁当も一人で食べている。しかし、彼女がいるから学校に来てると豪語する酔狂な人間もいるらしい。

でも、時々、木塚さんの笑顔が、電車で見えた女の子を思い出させるのだった。

電車で見えた女の子は相当の美人だった。木塚さんも顔は可愛いけど、でもなんか普通っぽい。なぜだろう。

夏休みになった。僕はいいよ、計画を実行に移そうとした。

西武新宿線の駅に向かおうとすると、途中で私服の木塚さんに会った。

彼女はチェックのシャツにジーンズ、リュックという鉄オタな装いだが、どこことなくおしゃれな感じがする。シャツにフリルが付いていたり、第一ボタンを開けて着用していたりといった細かい部分に気を遣っているからだろう。

「偶然だね。山岡くん、どこに行くの？」

木塚さんがトコトコ近づいてくるので、僕は軽く答えた。

「あはは、うん。本川越まで」

「誰かに会いに行くの？」

「うん」

頷いた僕は、ちよつと良いことを思いついた。

「知り合いの女の子に会いに行きたいんだけど、お土産を選んでくれない？」

僕はあのとときに泣いていた女の子に会いに、本川越まで行くんだ。

三年前に電車で泣いていた彼女は、近所の女の子だった。

古くて小さなアパートに住んでいて、そこは人の出入りがひどく少なかった気がする。

友達が来ないどころか、新聞屋さんもその家には配達を行っていなかった。

時々目がうつろな女の人が外出していたが、おそらく女の子のお母さんだろう。

多分、女の子の生活はちよつと大変なものだったのかもしれない。彼女は一人、本川越の方に住むおばあさんの家に引っ越してしまった。

木塚さんは多分優しい。嫌な顔をせずに、可愛らしいシャープペンシルを選んでくれた。

お土産なんて言うてはみたけど、僕がそんなに高いものを買えないことを知っているようだった。

「木塚さんはどこに行くの？」

僕の質問に、鉄オタの女の子は笑った。

「本川越まで」

そうして、僕たちは、旅行というにはあまりに近距離で、お出掛けというにはあまりにドキドキする、探検に出かけることにした。

電車は下りなのでガラガラだった。僕たちは隣同士で座る。

木塚さんはスマートフォンから一つの電車の写真を見せてくれた。

「これはスマイルトレイン。西武鉄道の人気の電車だよ。女性が製作に関わったの。まるで正面から見ると、電車が笑っているみたいでしょ」

「へえ。毎朝電車に乗っているけど、見たことないなあ」

「そんなことはないと思うよ」

そう言って木塚さんは、スマイルトレインの側面の写真を見せてくれた。

「あ、見たことある。へえ、この電車って正面から見たら可愛らしいんだね」

僕の言葉に、木塚さんは満足したように微笑んだ。

「うん！ いつか見てみてね！ そして乗ってみて！ 電車にただ運ばれているなんてダメだよ！ 電車は荷物を運ぶだけじゃない。街と街、心と心を繋ぐものだから」

この人、本当に電車が好きなんだなあ。

木塚さんがいつもよりちよつとだけ可愛く見えた。

「なにか乗りたい電車はある？」

木塚さんに尋ねられて、僕は思わず正直に答えてしまった。

「銀河鉄道」

普段の僕だったら、愛想笑いをして、相手の機嫌を損ねないように『西武鉄道かな、毎日お世話になっているし』なんて当たり障りのない返答をするだろう。

でも、木塚さんは思ったよりも幸せそうに話しやすい人だった。

だから、久しぶりに本音を言ってしまった。

「僕は必要とされたい。ジョバンニはいいね。カムパネルラみたいに優しい人から、最期の時間を共に過ごす相手選ばれて。」

僕こそ……みんなの本当の幸いのためなら、千回でも、一万回でもこの身を焼かれても構わない」

言った瞬間、僕は後悔した。木塚さんが目を丸くしていたからだ。

木塚さんは首を傾げて答えた。

「山岡くんの身体が焼かれても、誰も幸せにならないよ」

木塚さんはジーンズの裾を上げて、ふくらはぎを見せてくれた。

普段はハイソックスに隠れて見えないふくらはぎには、火傷の痕があった。

「私が火傷しても、誰も幸せにならないよ。誰かを不幸にする人は、不幸なんだよ。幸せな人だけが誰かを幸せにできるんだよ」

今まで木塚さんの笑顔を妬んでいたことを、僕は恥じた。

僕が不幸だから、どす黒い感情の塊だから、僕は木塚さんにもそうなるように望んでいる

節があった。

もっと自分がバカだっことに気づけばいいのに。周囲に疎まれていることに気が付けばいいのに。

もっと周りを疑って、卑屈になればいいのに。

ずっとそんなことを考えていた。

でも、木塚さんが木塚さんのまま、大人になれたらどんなにいいだろう。

木塚さんみたいな大人がいてくれたら、子供はどんなにホッと息がつけるだろう。

「僕だって本当は、笑って過ごしたかった」

「え？ いつも笑っているじゃん」

木塚さんはまた目を丸くする。今日の彼女には変な顔ばかりさせてしまっている。

僕は俯きがちに述べた。

「心の底から笑いたい。いつもいつも、他人の評価ばかり気にして、他人にとっての理想の自分であろうとしているんだ。

優しい方が良く、愛想だっ方がいい方が良く、相手が望む受け答えをしちゃうし。

勉強だっでできた方が良く、運動もできなくちゃって思うけど、なかなか上手くいかなから、わざと手を抜くんだった。だっで目立ちたくないし。泥臭いのカッコ悪くなっで」

「できなくとも良いじゃん。真面目なんだね……」

「本当は木塚さんみたいに、笑われているのを気にしないで、全力で頑張りたい！」

「いやいや、気にしないわけじゃないよ」

木塚さんは苦笑いを浮かべた。

「小学校の頃は逆上がりが一人だけできなくて、四年生になっでも補助器具を使っでいることが恥ずかしかった。運動ができる人と同じチームになっで足を引っ張ることが怖かった。私にとっで『できる人』っていうのは恐怖の対象だっだ。

周りに迷惑をかけていることもわかっていたし、でもそれをカバーできるほどコミュニケーションも無いし、家でも学校でも怒られてばっかりでね。

もうここまで来ると笑うしかないんだよ。笑っで全部ごまかしちゃう。

笑顔っでさ相手にとっでわかりやすいから、誤解されることも減ったし。

笑うとさ、楽しくなるんだよ」

「逆だよ、楽しいから笑うんだろ」

「いやあ、笑っでいると笑っでいる人が周りに集まっで来たよ」

「それは木塚さんが面白いから、周りの人はつられて笑うんじゃないっで？」

「うーん、だったらいいなあ。そうじゃなくともいいけど。笑われるのも、笑わせるのも、一緒に笑うのも、なんでもいいよ。要するに笑顔があればいいっでこと」

木塚さんもやっぱりコンプレックスとか、あっだんだ……。

「木塚さんも、いろいろ考えていたんだね」

少し純粋すぎるけど、僕なんかよりずっといい。

「バカだけどね、まあ人間だからね」

「僕も小さい頃はもつと純粋で素直だったんだ。でも友達に裏切られてからは、臆病になっちゃった。人の悪意ばかり信じて、優しさが信じられないんだ」

「大人になつたんじゃない？」

「そうかもね」

どっかの小説で誰かが言っていた気がする。

大人にとつては、素晴らしい事よりも恐ろしい事の方が、ずっと信じやすいことだからって。

じゃあ、子供みたいな大人になりたいよ。

「本川越に着いたよ」

木塚さんはスツと立ち上がってホームへと舞い降りた。

本川越の町並みは、都会と比べて屋根が低いと思つた。空も広い。

でも四国のおじいちゃんちに比べたら、やっぱり人の気配が多かつた。

「山岡くんはどこに行くの？」

「ちよつとそこまで。バイバイ、いろいろありがとう、木塚さん」

僕はそう微笑んで、木塚さんに背を向けた。

「ねえ！ 二学期になったら、一緒にスマイルトレインに乗ろうね！」

木塚さんの声を、僕は聞こえないふりをした。

木塚さんはきつと優しい。一緒に話していると、明るくなれる。

でも、僕は電車で泣いていた彼女と一緒に銀河鉄道に乗りたくないんだ。

「……久しぶり」

彼女—— 辺見さんは、三年経つた今でも綺麗だった。

すらつと背が高く、白いワンピースに身を包んだ姿は、透明感があつた。

「山岡くん？」

僕はお土産を辺見さんに渡す。

「開けていい？」

頷くと、辺見さんは小さな包みから淡いスマイレ色のシャープペンシルを取り出した。

「お友達に選んでもらつたでしょ？」

「ばれた？」

「わかるよ。ありがとう、嬉しい」

辺見さんは柔らかく微笑んだ。

今までたくさんの女の子を見てきたけれど、やっぱり辺見さんは誰にも似ていない。

この笑顔を、優しい声を誰にも表現できない。

「ねえ、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』って覚えてるかな？」

「私達の思い出の本だよ。忘れるわけじゃないじゃない」

僕は思い切り息を吸い込むと、緊張した笑顔で告げた。

「ねえ、僕たち、どこまでも一緒に行こうね！」

でも、辺見さんは首を横に振った。

「ダメ」

僕は予想もしない答えに笑顔を消した。

「どうして……？」

「私も山岡くんと一緒に居たい。どこまでも行きたい。」

でも、私は私。山岡くんは山岡くん。一緒にいるとその境界線がなくなっちゃう。

大切過ぎて、無くなっちゃう。

だから、大切なもの、たくさん作ろう。

私が山岡くんを独り占めしちゃだめなの」

「僕はそれでもいい！ 辺見さんのこと、忘れられないよ！」

「忘れるの！」

辺見さんは笑っていた。

きつと辺見さんの方が、大人なんだ……。

「あなたが乗るべきなのは、銀河鉄道？」

辺見さんの言葉に僕は笑った。

「ううん。スマイルトレイン」

駅に戻ると、木塚さんが待っていた。

「待っていてくれたんだ、ありがとう」

僕的笑顔を見ると、木塚さんは少しハツとしたような、心配したような顔をした。

「山岡くんの笑顔っていいね。本当に素敵な笑顔だから、みんなが集まってくるんだよ」

木塚さんは僕の顔を上目遣いで見た。

「ねえ、笑うのって嫌い？」

僕は少し考え込んだ。

でも、木塚さんもコンプレックスを持ちながら笑顔でいる人間だとわかったので、自然と

本当のことが言えた。

「うん、嫌い」

「私は好きだよ。笑うことが好き、喋ることも好き、食べることも好き、笑われるのも好き

だよ」

木塚さんは僕に微笑んだ。

「泣くことも好きだからね」

その瞬間、僕の頬を一筋の滴が伝った。

「泣かないと笑えないよ。笑うだけなんて、できないよ」

そう言って、木塚さんは僕にハンカチを差し出してくれた。

ああ、そうか。

笑うのって良い事のはずで、なんで辛いかとずっと思っていた。
笑えば笑うほど、心の中にどす黒い塊が溜まる気がしていた。
僕は泣きたかったんだ。

言いたいことをもつと言いたかったんだ。
辛いよって、苦しいよって。

「うああ……うああ……うあああん……」
帰りの電車はスマイルトレインだった。

この電車はあの日に繋がっていないこと、わかっている。
でも、この線路は明日に続いている気がした。